

(月刊『世界』二〇一四年五月号)

誰にウクライナが救えるか

友ユーシエンコへの手紙

### 春遠き夜、キエフにて

三年間の日本大使館勤務から帰国して以来、すでに一五年の歳月が過ぎようとしています。私の離任を数日後にひかえた一九九九年三月一日、ウクライナ国立銀行総裁の要職にあり、激務の貴殿を大使公邸の夜宴に招いたときのことを、いまは懐かしく思い起こします。

みぞれ降りしきる、いまだ春遠き夜でした。あの日、約束の七時に一時間ちかくも遅れて到着した貴殿は、側近のリバルチューク国際局長とともに愛用のバイオレット・グレーのボロボロから降り出ると、公邸の玄関に向けて慌しく駆けこんできました。その手には、ワシントンのIMF本部とつながったままの携帯電話が握られています。

「あなた方に経済を改革する勇気がないのなら、われわれはこれ以上資金を貸すことはできません」。

通貨防衛のあくなき闘いはつづいていました。前年夏、ロシ

アの金融市場が崩壊してウォール街を凍りつかせた一九九八年八月、ロシアへ大きく依存するウクライナもまたデフォルト(債務不履行)の危機に直面しました。そして、その後はまさに俵に足をかけたまま、土俵際であやうく堪えているような状態にあったのです。

しかも、頼みとするIMFのスタンダードバイ・クレジット(中期融資プログラム)は、深刻な流動性不足のなかで前年九月に一旦はスタートしたものの、電気・ガス料金の引き上げや、年金制度の改革などの条件が満たされていないとしてその継続が見送られており、再開をめぐってワシントンとのあいだで連日厳しいやりとりが行われていたのです。

食事が終わったときには、すでに一〇時を少しまわっていました。

「ウクライナ政府はロシアの影響を最小限にコントロールし、またデフォルトを回避するため、債務のリストラクチャリング(償還期間の長い債券への巻き替え)にも成功しました。われわれは現在、IMFと率直かつ精力的に交渉を行っています。融資は近いうちに再開されると確信します」。

最後に、貴殿はこう希望を表明しました。そして、「まだやり残した仕事があります」と言い残し、足早に車に乗りこむ後ろ姿を、私はうつすらと白い雪が積もった玄関先から見送りました。実際に再開されるには、さらに二カ月後の五月はじめまで待たねばならなかったのですが……。

私がキエフを発ったその年末、貴殿はウクライナ・リバイ

バルの切り札として首相に指名され、シテイやウォール街の名だたる投資家を相手に債務の繰り延べ交渉を成功させ、国民の支持を獲得します。その年、ウクライナのGDPは独立後始めてプラス成長に転じました。そして、四年後の二〇〇四年には、国土を東西に二分する大混乱となった、かの「オレンジ革命」を率いてヤヌコビッチ氏に勝利し、翌年一月に第三代大統領に就任したのでした。私は、貴殿の活躍ぶりをモスクワから応援していました。

「オレンジ革命」が無血の政権交代であったのに対し、ユーロマイダン（「マイダン」は広場の意）の反政府運動に端を発するウクライナ二月政変は、警官を含む八〇名を越える血の犠牲によって遂げられました。その背景には、貴殿の後継、ヤヌコビッチ前大統領の権威主義政治がもたらした汚職と腐敗、経済の破綻に対する国民の激しい憤りがあったと私は考えています。もちろん、ヤヌコビッチ氏が二〇一三年末、EUよりもロシアとの関係を選んだことへの落胆と反発はあったでしょう。けれども、それ以上に、人々は社会の腐敗と経済の行き詰まりに対するやり場のない不満を抱いて「マイダン」に集ったのです。

そして、群衆の不満は武装ナショナリストの蜂起によって煽られ、暴動の悲劇へと発展しました。

他方、この事態を受けて、主要な野党勢力の代表とヤヌコビッチ大統領（当時）、EU当局者たちは政治危機の收拾で一旦は合意しました。が、まもなく決裂し、同大統領は失脚し

ます。私は二月政変をこのように理解しています。

### 汚職と腐敗、経済の破綻

さて、二〇一三年一月はじめ、私は懐かしいキエフを訪れました。まず、そのときの印象について述べたいと思います。

ウクライナの首都キエフは、ヨーロッパ史の名残をとどめるスラブの古都です。帝政ロシア時代、キエフの街は、肥沃な黒土がもたらす砂糖や小麦と、ドニエプル川の水利を活かした交易で繁栄します。往時の美しい街並みの多くは、二〇世紀に入って社会主義リアリズム、すなわち別名「スターリン様式」と呼ばれる灰色の建物群とナチス・ドイツの侵攻によって損なわれはしましたが、商業と貴族と革命の歴史の痕跡は、高台の官庁街や河川港からほど近い旧市街に点在する、ルネッサンス風の文様や漆喰の紋章で飾られた淡いブルーや柔らかなクリーム色の邸宅と、それらにまつわる企業家やデカブリストの家族、幾多の詩人たちのエピソードとともに、いまも面影をとどめます。

街の中心を東西にフリシャーチク通りが走ります。そのひとつ裏通り、閑静なプーシキンスカヤ五番地。トルクメニスタン大使館と斜めに向き合うその場所に、かつて四階建ての古い住宅がありました。かの「マイダン」は、そこから歩いて数分の距離です。キエフでの在勤中、私は家族とともにそのアパートの四階を借りて住んでいました。一五年の不在中

にあたりはすっかり変わっていましたが、懐かしい気持ちで散歩しました。

余談ですが、住宅のオーナーはウクライナ正教会のデニセンコ総主教（正式には「フィラレート」と称される）でした。広間の高い天井からは眩いほどのシャンデリアが吊り下がり、壁には年代物の荘厳なイコン（聖像の絵）が架かっていました。私はこのアパートを、火事にあつた聖堂の修復費用にあてたいという話を聞いて借り受けたのでした。月はじめになると、フィラレート自ら、艶のよい白い顎ひげをたくわえた老紳士姿で家賃の受け取りに訪れます。たまに聖ソフィア寺院前の広場などで、教会行事を見守る群衆のなかに私と家族の姿をみとめると、フィラレートは威厳をたたえた表情を崩さないながらも、少し照れくさそうな顔をしていました……。

それはともかく、懐かしさとは別に私の心を重くしたのは、汚職と腐敗でよどんだ社会に漂う停滞した雰囲気でした。しかも、それが行政にとどまらず、どうやら人々の職場や日常生活の領域をも蝕んでいるように思われたことです。各種許認可の証明手続きから、税務、警察、税関はいうに及ばず、腐敗は司法の世界にも浸透していました。裁判では、係争案件ごとに判決のプライスリストがあることを誰もが知っており、裁判所の事務職員から容易に入手できるのです。

「ヤヌコビッチ政権下、この国では盗みが生活の規範になるうとしています」。

旧友のひとりは、私に訴えかけるようにこう語りました。そ

して、付け加えました。「人々は、何が正常な制度であるかを見失いかけているのです」。

社会の腐敗はそれほどまでに深刻でした。当然ながら、ビジネスは低調になり、経済は低迷します。欧米系の銀行は、すでに二年ほど前から次々に撤退していたのでした。

私が日本大使館に勤務した一九九六年四月から一九九九年三月にかけての時期、キエフにはウクライナ系移民の二世、三世が多く住み、欧米企業の駐在員や国際機関などが派遣するコンサルタントとして活躍していました。カナダやアメリカを中心、北米には二五〇万とも三〇〇万ともいわれるウクライナ系移民、いわゆる「ディアスポラ」がいます。ソ連の崩壊とともに彼らの多くが祖国へ戻り、まるで荒れ果てた大地を一から耕すように、新たな市場の開拓に余念がなかったのです。週末には、気の置けない仲間同士のホームパーティーがありました。彼らと過ごした心地よい時間は、在任中の忘れがたい思い出です。その欧米コミュニティも、いまではすっかりさびれています。

一方、経済の舵取りはどうかといえば、電気料金やガス料金、なんと一五年前さながらに逆ザヤのままなのです。IMFは、ウクライナ政府によるエネルギー補助金がGDPの七・五%に達するほどだ（二〇一二年）と報告しています。政府は慢性的な財政赤字に悩んでいます。そして、歳入不足を国債発行で賄うために、中央銀行は金利を高く維持するとともに、愚かにも通貨をドルにリンクさせる通貨高政策を漫

然とつづけていたのです。

しかし、そのような政策をつづければ国産品の競争力は落ち、代わって輸入品ばかりが増えることになります。案の定、スーパーマーケットは輸入雑貨や輸入食料品で溢れています。「フランス家庭のクロワッサンは、やがてウクライナ産に取って代わられるだろう」と、かつてフランス農家を不安にさせたウクライナ農業も、いまではすっかり競争力を失っています。私の知るウクライナは、肥沃な黒土に恵まれた五穀豊穡の国だったはずなのに。以前は人気のあった国産ビール「オボロン」も姿を消していました。

他方、中央銀行は、市場介入によって貴重な外貨準備を取り崩すという悪循環に陥ってしまいました。外貨準備はすでに二〇〇億ドルを大きく割って輸入の二カ月分にも満たない水準で、デフォルトの危険性が指摘されているのです。今後一年以内の債務返済は総額六五〇億ドルにのぼるという見方もあり、それに加えて年間一五〇億ドルの経常赤字が見込まれていました。つまり、今後一年間に約八〇〇億ドル以上の外貨建て資金需要が控えていると予想されているのです。

要するに、政府は巨額の債務を抱え、経済は破綻の淵に近づきつつあるということです。二月政変の根源はここにあると私は考えています。

### 親ヨーロッパVS親ロシア

そもそもウクライナという国は、国家としてのまとまりを

形成しにくい歴史を有しています。ドニエプル川をはきんで、国土の東部と西部とで、その生い立ちと経済の成り立ちが大きく異なっているのです。

歴史的に、この地域一帯はもともとポーランドの影響下にありましたが、ドニエプル川左岸の東ウクライナは、キエフを含めて早い段階で帝政ロシアに併合されます。そして、東部のドンバスは、豊富な石炭と鉄鉱石に恵まれて、ロシアの重工業化政策の一翼を担って発展を遂げるのです。したがって、東ウクライナの経済にはいまもロシアとの関係が欠かせません。

これに対し、ガリツィアをはじめ西ウクライナは、ポーランドやオーストリア・ハンガリーの一地域として常にヨーロッパ史の変遷とともにありました。現在の版図全体がソ連になったのは、ほんの戦後のことでした。

そのため、この国を東の端から西の端まで車で走ると、地域の生い立ちを反映して、景色がはつきりと変わるのです。東のロシア国境に近いドンバスは重工業地帯で、まさに社会主義ソ連そのものでした。

他方、キエフから西へ行くと、リトアニアやポーランド時代の崩れかけた城壁や貴族の屋敷跡があちこちに残り、ヨーロッパ史の一端をそこに垣間見ることができました。また、ガリツィアの中心都市リヴィウには、ヨーロッパの情緒が静かに息づき、街のたたずまいはヨーロッパそのものなものでした。そして、さらに標高一六〇〇メートルのカルパチア山脈を西

へ越え、なだらかな裾野を埋める赤い屋根と白壁の家々や丘の斜面のぶどう畑を見てみると、そこはもうヨーロッパなのだと思つたものです。

他方、ウクライナには、東部を中心に全人口の一七%、およそ八六〇万人のロシア人が住んでいるといわれています（二〇一二年国勢調査）。ソ連崩壊直後に行われた国民投票では、これらのロシア人の多くがこの国の豊かさに希望を託し、ウクライナ人とともに独立への意思を表明しました。

しかし、初期の高揚感が去つたあと、そこに見えてきたのは東西の心の谷間でした。それ以来、親ヨーロッパ派と親ロシア派のあいだで国論が分かれ、この国の政治は両者の危うい妥協の上に成り立ってきたように思われます。またそのため、政府は税制の改革や公共料金の値上げ、年金制度の改革など、国民の痛みをともなう不人気な改革を実行できず、市場経済にふさわしい財政基盤を確立することすらできずにきたのではないかと思います。

かつて在任中、私には、こういう国で金融と財政を担当する貴殿や若い財務大臣の疲れきつた後ろ姿を見ると、本当に気の毒に思えたものです。ウクライナ国立銀行の三階で、貴殿がブドウを口に運びながら議会を批判していた様子をよく覚えています。けれども、一五年後のいまもなお、ウクライナでは歳出を減らすための改革がそれほど進んでおらず、同じ課題を解決できずにいるのです。

要するに、ウクライナはひとつの国としてのまとまりを形

成できないまま、東西の対立と政争に明け暮れているうちに、いよいよ経済が行き詰つたということのようなのです。

そしてこの間、両者の妥協のツケを外国からの借金で埋め合せてきた。つまり求められているのは、通貨「フリブナ」の思い切つた切り下げも含め、身の丈にあった経済と生活に戻つて出直さなければならぬということ。私はそう考えています。

#### ロシアなしで経済は立ち行くか

私には、ウクライナがEUとの連合協定（自由貿易協定）をのぞむ理由が理解できません。利益を得るのがドイツやフランス、ポーランドなどEU諸国であることは明らかです。低迷するEU経済は、人口四六〇〇万の一大新興市場を手中にできるのです。けれども、ウクライナが競争力を有する輸出品には厳しい輸入割当（各国ごとに上限二%の範囲内）が課されます。これではウクライナはEU商品に市場を奪われ、自国の経済を痛めるだけなのです。東部や南部の鉱山業や化学産業は深刻な打撃を受けるでしょう。また、ウクライナ農業は、手厚い補助金に守られたEU産品との競争によつて苦境に立たされるにちがいません。しかも、連合協定を締結したとしても、近い将来EUに加盟できるとは限らないのです。

おそらく、ヤヌコビッチ前大統領にもそのような事情はわかっていたはずですが。他方、ヤヌコビッチ氏はロシアとだけ連携したかったわけではなかったでしょう。デフォルトの危

機が迫るなかで、貴殿を含む過去の大統領と同じように、ロシアとEUのあいだでバランスを取ろうとしていました。交渉のねらいは、EUとの連合協定そのものに共感したからではなく、ロシアとEUの双方を揺さぶる「金策」にありました。けれどもEUが態度を崩さず、資金援助を拒んだため、ロシアへと向かいました。そして、これに対してロシアは、公的債務の償還に必要な一五〇億ドルの金融支援と、天然ガスの三三%割引を約束してこたえたのでした。

しかしながら、二月政変後、ロシアとの関係は根底から変わり、この金融支援は撤回されました。それに代わって、国際金融機関やEU、アメリカ、日本などから債務支援を受けられることになりましたが、今後は天然ガスの値引き(年間二〇億ドル相当)はなくなりません。加えて、ロシア国営ガスプロムからは、二〇億ドルの滞納金の返済を求められてもいます。ウクライナ経済は、欧米諸国の金融支援を得られたとしても先行きは依然として相当に厳しいと言わざるをえません。

他方、私には、そもそもロシアの支えなしにウクライナの経済は立ち行くのだろうか、という基本的な疑問があります。ウクライナは石油・天然ガスをロシアから輸入しています。しかし、これまでその代金のすべてを通常の貿易取引としてまともに支払ってきたわけではありません。なぜなら、支払いが滞るたびにウクライナは、国内に残った旧ソ連の資産、たとえば黒海艦隊の持ち分の売却やその基地としてのセバストポリ軍港のリース料、あるいは石油・ガス輸送パイプライ

ンの通行料による相殺や過去の債務の長期的な繰り延べという形で、ロシアとの間で政治的に解決してきた経緯があるからです。核弾頭の撤去とロシアへの譲渡も例外ではありません。

この関係こそ、まさしく「石油は穀物より強し」というべきでしょう。ウクライナ経済の基盤は脆く、ロシアにこれほど大きく助けられてきました。逆にいえば、そのようにしてロシアはウクライナに対して影響力を発揮してきたのでした。

#### ウクライナの安定はウクライナ人にかできない

ロシアにとり、ウクライナは正教文明のルーツを成し、自らのアイデンティティにつながる国です。また、地政学的にみると、ロシアとヨーロッパの間に位置しており、黒海はロシアにとって南の海への出口にあたります。つまり、ウクライナはユーラシアの要衝にあるということです。ロシアはウクライナなくして帝国たり得ず、ウクライナあればこそその帝国である、といわれる所以です。

要するに、ウクライナはロシアが生命線とみなす国なのです。歴史的にも、一七世紀なかば、ロシアはウクライナを併合したことによりヨーロッパの列強に加わったのでした。

そして、かたやEUやアメリカもまた、ウクライナを地政学的な観点で重要視しているからこそ、現下の混乱を最小限に止めるために経済支援に動きだしました。

同時に、それによってロシアとの間にくさびを打ち込みたい

と狙っています。しかし、その欧米諸国自身が各国経済に深刻な不安を抱えている状態で、急落するウクライナ経済を最後まで支援する覚悟があるとは到底思えません。

私には、EUがロシアに代わってそこまでするとは思われません。EUやアメリカは、実際に危機が起きたのを見て慌てて経済支援に動きだしました。ウクライナ問題への対処について、冷徹で慎重な判断と覚悟があったわけではないでしょう。

要するに、ウクライナの安定はウクライナ人にしかできないのです。欧米諸国とロシアの対立が険しさを増すなかで、五月末に選出される新しい大統領は、「プーチンのロシア」との関係はどうするかというむずかしい選択を迫られるにちがひありません。そして、プーチン大統領はそれを冷徹に見抜いているはずです。また、それゆえに動じないのです。

一方、ロシアはクリミアに侵略し、併合しました。情勢は緊張を増しています。

「ウクライナで何が起きているか。これについて答えることは数日前にはむずかしかった。しかし、ロシアがクリミアに侵略したいま、私は平易な言葉で答えることができます。私たちはいま、自由と独立のために闘っているのです、と」。キエフの友人は、私にメールでこう伝えてきました。

また、別の友人はこう記します。

「ロシアによる反ウクライナ、反ヨーロッパのプロパガンダという情報戦はプーチン氏の巨大な罪です。ウクライナ人と

ロシア人の兄弟のような友愛の情に満ちた関係を、プーチン氏はどうしようというのでしょうか」。

しかし問題は、暫定政権が内部にはらむリスクです。暫定政権は、「右派セクター」と称される過激なナショナリストの「連合体」から、チモシェンコ元首相グループまでの寄せ集めといわれます。この政権に求心力を期待することは無理でしょう。

私はナショナリストの独立信仰に危うさを禁じ得ません。したがって、不測の事態が起こり得るリスクをいかに管理していくか、これがいまもっとも重要な課題なのではないかと思っています。

他方、EUやアメリカは把握しているはずですが、この政変の初期において、ビルの上から反政府集会の参加者や警官が狙撃され、警官八名を含む二〇名以上が犠牲となった悲劇について、スナイパーを雇っていたのが暫定政権側であったという事実を。

また、暫定政権の国防・治安部門を掌握しているのが、デモ隊の急進化を扇動した「右派セクター」のナショナリストたちであることを。そして、彼らの多くは反ロシア主義を掲げています。おそらく、プーチン大統領が一歩たりとも譲る気配を見せないのはそのためでしょう。

しかし、親欧米的だった貴殿をはじめ、私の知るウクライナの人々が過激なナショナリストたちを支持することはないでしょう。私はそう確信しています。